

# 中河與一「天の夕顔」の批評圈

——倉田百三の同時代評を中心に

黒田 俊太郎

一

恋愛小説「天の夕顔」(『日本評論』昭和二三「一九三八」・二)は、中河與一(明治三〇「一八九七」→平成六「一九九四」)の代表作として世上に知られた作品である。もともと現在、中河に関する研究は、この作品に限らず散発的にしか行われていない。中河の固有名は、彼の作品群とともに忘却の彼方へと消え去ろうとしている。

川端康成や横光利一とともに新感覺派の旗手として、昭和戦前期の文学界で活躍した中河が忘却されようとしているのには、いくつかの複合的な理由があるのだろう。しかし、その理由の一つに、彼がアジア・太平洋戦争の最中、全体主義を鼓吹する活動に邁進し、戦後の昭和二三年三月二〇日、G項(その他の軍国主義者および超国家主義者)に該当するとして公職追放の仮指定を受けたということが挙げられるだろう。

ただし、保田與重郎が新潮文庫『天の夕顔』(昭和二九・五)に寄せた「解説」において、「大東亜戦争中から戦後にわたつて、おおよそ四十五万部を出したといふから、その読者の数からいっても、またその作が喜ばれてきた歲月の久しい持続からいつ

ても、近来文壇において珍しい作品である」と述べているように、中河は自身の公職追放後も、足掛け一七年に亘る(天の夕顔ブーム)の只中にいた。その間、小説「天の夕顔」は国内外(独語・中国語・英語・仏語に翻訳された)の出版一五社から一七度も単行本化されており私はこうした事例を他に知らない、昭和二三年には高峰三枝子主演で映画化(製作新東宝、監督阿部豊)されてもいた。

「天の夕顔」の発表当時の状況について、中河自身は、「誰も見向きもせず、所謂黙殺せられて一行の批評さへ出なかつた」と回想している。実際、新聞・雑誌の文芸時評欄を、「天の夕顔」発表の翌月から半年間に亘り可能な限り広範囲に調査したが、「天の夕顔」に対する評言を見出すことはできなかった。

先の保田の「解説」は、そうした「黙殺」に関わる「事情」について、「文壇の俗事に触れる必要はない」としながらも、「天の夕顔」が「文壇のからくりに対し、本質的な、根本的な、文学上の抵抗を示したものであり、挑戦を実践し」たことに、その一因を見ている。もともと保田は、そうした中河の「挑戦」を敵視した文壇が、制裁目的で「黙殺」したと考えていたわけではない。そうではなく、「文壇的時評家は一言する術を知ら

なかつた」<sup>(注4)</sup>のであり、文壇は中河の「挑戦」を「挑戦」として受け止め得る発想も、言語化する言葉も持たなかったというのである。

そしてその代りに、永井荷風・徳富蘇峰・与謝野晶子・頼原退蔵・久松潜一などの「円熟した文人」と、「軍国の青春の花ざかりにゐる人々とに、同時に喜ばれたこと」、そして、「戦後の青少年が、なほかつこの小説のストイックな恋愛の情緒を楽しんでゐるといふ事実」に、保田は「一つの安堵感」を覚えるとしている。<sup>(注5)</sup>

保田がここで指摘している〈天の夕顔ブーム〉と呼ぶる現象が加熱するのは、この作品が三和書房より単行本として刊行された昭和一三年九月以降のことである。中河によると、「作品は本にすると、幾らでも売れ、一カ月に三度も増刷するといふ有様で、その普及度は驚くばかりであった。<sup>(注6)</sup>紙の制限が始まった頃で、本屋はくやしがつて悲鳴をあげた」といい、いわば単行本化というメディア形式の変容に伴い、「紙の制限」という強烈な逆風を受けながらも書籍の量産・販売体制が整備化されたことに後押しされ、商業的な成功に結びついたことで、同作品を称賛する評言が噴出することとなるのである。

小論は、大衆小説に特有の通俗性とは対局的性格を持つこの小説が、ある種の〈通俗性〉を獲得してしまつた戦中期の〈天の夕顔ブーム〉の様態を見つめ直す。いかなる人々が、いかなる理由で「天の夕顔」に惹きつけられていったのか。ブームと言う現象を創造した読者共同体の性格を、新聞・雑誌という活

字メディアに書評を発表し得た数名の読者の読み方から、演繹的に考察してみたい。本稿は特に倉田百三という読者に注目するが、次節ではまず、永井荷風の「読み方」を見ていきたい。

## 二 荷風の「読み方」

同時代評を見ていく前に、「天の夕顔」がいかなる作品だったのか、中河自身による作品の梗概を参照することで確認しておこう。

物語の筋は、京都が背景で、一人の大学生が年上の女性に憧れ、一生を捧げるほどの熱烈な恋愛にとらへられる。幾度となく求愛するが、貞操堅固な人妻はそれを断はる。然し彼の憧れ、彼女に対する尊敬はつのるばかり。幾度か機会がありながら、そのたびに拒否せられる。

彼は自分の気持を静めるために飛騨山中の高山に登って、その雪の中で一冬をすごし、逢つてもいいといふ日、訪ねてゆくと、彼女は死んでゐたといふ筋であった。そこで昇天した彼女に消息するために火花をうちあげることが思ひつく……。

そんな物語であつた。<sup>(注7)</sup>

同時代評のほとんど全ては、二つの冊子体にまとめられている。一つは、『不確定性ペーパー 第三輯 「天の夕顔」中河與一作品研究』(新典社、昭和一三・一二)である。『不確定性ペーパー』の発行兼編集人は三ツ村滋恭で、この人物は詩人であり、現代

詩の同人雑誌『歷程』発行兼編集人でもあった三ツ村繁蔵である。第一輯は高村光太郎の作品論、第二輯は百田宗治の作品論を掲載しており、おそらくは第三輯をもって終刊している。

第三輯に集められた「天の夕顔」評は、これより以前に発表された形跡がないため、全て書き下ろしであると考えられる。掲載順に列挙すると、與謝野晶子「天の夕顔」・久松潜一「天の夕顔に就いて」・三浦常夫「永遠への思慕―天の夕顔」に就いて―・田中克巳（無題）・山木和夫「天の夕顔」に寄す（詩）・三ツ村滋恭（無題・詩）・真田喜七「天の夕顔」の地上性」の、書評五編・詩二編である。

三ツ村はここで自身の詩（無題）を掲載しているが、そのなかで「私はこの男のやうに莫迦になりたい／むしろ莫迦を超えてゆきたい」と、「天の夕顔」の主人公の男に対する強い共感を表明している。そしてそのことが『不確定性ペーパー』で「天の夕顔」を特集しようとした動機となっていたことだろう。

もう一つの冊子体は、昭和十五年一〇月に単行本『天の夕顔』の発行所が三和書房から報国社へと変更された際、附録として挿入された「批評集」（全三三頁）がそれである。発行所が変更された理由は不明である。表紙や函の装丁は異なるが、同じ紙型が使用されており、頁数・値段ともに同じである。ただし、報国社版の初版本に使用されている紙は明らかに粗悪な酸性紙に変更されており、これは中河の回想にあった「紙の制限」という出版資材の統制の問題と関連していると思われる。

「批評集」に掲載された「天の夕顔」評は全て既発表のもので、

発表順に列挙すると、永井荷風（中河宛書簡、昭和二三・一・二七付）・倉田百三「魂の掟を持つ文芸」（『やまと新聞』昭和二三・九・三〇）一〇・四）・陶山務「永遠の女性に就いて」（『若草』昭和二三・一〇）・清水文雄「日本の発想」（『国文学と鑑賞』昭和二三・一一）・南川潤「新刊巡礼」天の夕顔」（『三田文学』昭和二三・一二）・北原武夫「新刊批評―中河與一氏著『天の夕顔』（K）―」（『文体』昭和二三・一二）・山川弘至「歌ものがたりの伝統」（『ことば』昭和三四・三）・相馬御風「生々悲痛の哲理」（『読売新聞』昭和三四・三・一八）の、書簡一編・書評七編である。

作家が自身の単行本に「あとがき」を執筆するケースは存在するが、それは作品を作品世界の外部から意味付け直す作業であり、必ずしも一般的ではない。ましてや、「批評集」を附録とすることで、作家自身ではない（他者）の言葉による作品世界への意味付けを物理的に併置するということは、当時としても珍しいことだった。『不確定性ペーパー』は現在、公益財団法人日本近代文学館などでしか閲覧することが出来ないことから（日本近代文学館が所蔵しているのも、第一輯と第三輯のみである）、当時流通していた部数もおそらく僅少だったと推測できる。それに比較して、作品に近接して配置された「批評集」が、作品の読みを方向づけ、共通の解釈を分有する読者共同体を形成していく上で、一定程度意味を持っていたと考えるのは妥当であろうし、少なくとも中河自身は、「批評集」が併置されることで形成されてしまう解釈＝読者共同体の存在を批准してい

たとすることができらる。そうした理由から、本稿は「批評集」の書評を重視し、重点的に見ていきたい。

「批評集」の巻頭を飾ったのは、「天の夕顔」に対するもつとも早い反応でもあった、永井荷風の中河宛書簡（昭和一三・一二七付）である。

我日本の文壇も夕顔の一篇を得てギョーテのウエルテル、ミユッセの世紀の兒の告白この二篇に匹敵すべき名篇を得たる心地致候又故人二葉亭が浮雲とも比較すべきものと存候小生は読過の際何の訳とも知らずトリスタン曲中の最後の場悲しみのモチーフを聴くが如き心地に相成候

これは、三和書房版『天の夕顔』の広告文にも引用された箇所であり、「天の夕顔」評において人口に膾炙されてきた一節である。ここで「天の夕顔」は、ドイツの浪漫主義に影響を与えた作家ゲーテや、フランスの浪漫主義作家ミユッセの著名な作品と比肩されているが、荷風は昭和一三年一月二七日付の日記（「断腸亭日乗」）にも、「中河與一其作天の夕顔を送り来りたれば爐邊に一読す。敬服すべき大作なり。楽劇トリスタン曲中哀怨のライトモチーフを聴くが如き思あり」と賛辞を書き付けている。中河は、保田與重郎らが率いた雑誌『日本浪漫派』同人でもあったが（昭和一二年八月に同人組織は解散している）、三和書房版『天の夕顔』の広告文が「浪漫派文学 最初の巨弾」と喧伝されたことから分かる通り、「天の夕顔」は評論以外の実作に乏しかった日本浪漫派の運動の中からようやく誕生した「大作」「巨弾」だった。保田は、荷風の推薦が「本

を流布させたといふことは、殆ど考へられない」として、作品自体が保有する伝播力＝感染力を強調するが、「批評集」に掲載された書評七篇のうち五篇が荷風の書簡に言及していると考えれば、このとき還暦に手が届こうとしていた重鎮永井荷風の発言は、やはり重く受け止められたと考えられる。

もつとも保田は、荷風の「読み方」に最大限の敬意を払っていた。「主人公が当世風の柔弱男子にあらずして剣術を修められているという人物設定に感服する荷風の姿勢に保田は注目し、そこに「ロマンス」（恋愛・武勇を扱う物語）をよるこぶ「十九世紀以来の正統的な読書法」を見出す。そしてそれは、与謝野晶子の「剣道にも余程秀れた腕があるらしい変つた風格の持主であるのも凡ではない」とする「読み方」にも通底すると指摘するのである。保田の主眼は、荷風や与謝野晶子の「読み方」に、「十九世紀文芸の理想と回復と維持とをはかる」「保守の立場」「右翼といわれる立場」を見ることだった。

その一方で、これらの「読み方」は、「天の夕顔」を西洋由来の「正統的なロマンス文学」の系譜にあることを認定し、そうしたものがようやく日本にも起こってきたことを称賛するという仕方でもある。そうした方向性に比重を置いた読みには、「天の夕顔」を傑作とするその評価の背後に、日本の近代文学の（遅れ）を指摘するような、近代主義的な思考が実は編み込まれていた。

文学が何よりも先づ知性の領域のものでなければならぬと云ふ近代文学の精神が、どうやらこの国の文壇にも芽生え

て来たようである。しかしそれはたゞの理論として登場しただけであつて、残念ながらその具象化された作品にふれることは数少なかつた。今、この「天の夕顔」を読み終へて遂にこゝに一つの作品を持つたと云ふ喜びにふれた。

筆者はこの書を読みつつ、計らずも、ラフエイツトの「クレヴの奥方」生島遼一氏訳を想起したが、「天の夕顔」と同じやうな主題をもつこの名作の主人公もやはり武道にすぐれた人物であつたのを思ひ比べて、物語的な趣巧といふものが小説には如何に大切かといふことを改めて痛感したほどである。ただ「天の夕顔」の感性的な浪漫性に比べて、「クレヴの奥方」の美しさが、単なる浪漫精神から発生したのではなく、人間性に対する絶えざる深い思索と観察とから必然的に醸し出されてゐる（後略）<sup>(注16)</sup>

右に引用した、南川潤・北原武夫ら慶應義塾出身で、雑誌『三田文学』（荷風主幹で創刊された雑誌だが、荷風は大正五〔一九一六〕年に慶應義塾を辞職しており、この時直接の影響下にはない）から出発した若い三田派の文人たちの主張は、いずれも荷風の書簡を踏まえたものだったが、ここには保田が注目しなかつた荷風のもう一方の「読み方」の言説構造が、はしなくも露呈している。特に北原は、「天の夕顔」を高く評価しつつも、『クレヴの奥方』の「浪漫精神」が「人間性に対する絶えざる深い思索と観察」に裏打ちされたものであるのに対し、「天の夕顔」の「浪漫精神」がいまだ「感性的」であるとして、その〈遅れ〉を明確に指摘してゐたのである。

### 三 万葉精神と全体主義

このように荷風に代表される「読み方」は、日本の近代文学の後進性についての指摘をその内部に構造化しながらも、西洋の浪漫主義文学の系譜に位置づけられる「名篇」が日本で書かれたことを歓迎するというものだった。だがこうした読みに対しては異議申し立ても行われてゐる。

明治四〇年代に自然主義の批評家として活躍し、大正五年からは故郷である糸魚川に隠棲し文筆活動を続けていた相馬御風は、「靈肉相剋の悩みからはほのぼのとした「靈魂の夜明け」を認めかけた主人公が、最後に或高い世界への飛躍を志す」というありように、「源氏物語」や西鶴の「一代男」に連なる「日本的ロマンチック精神」を看取し、「ウエルテルのそれよりも、一層近代的な、一層日本的なあるものの暗示に富んでゐる」と<sup>(注17)</sup>する。すなわち、失恋の末ピストル自殺する「ウエルテル」よりも、愛する人の死という「悲痛を乗り越え、死をも生化して行」こうとする「天の夕顔」の主人公の男に、日本固有の精神性を読み取ろうとするのである。御風は当初、「作者はなぜ此の主人公を聖戦（稿者注―日中戦争）に参加させなかつたかを怪んだ」というが、それはそうした「日本的ロマンチック精神」を表現させるために主人公の男を生かしめる必要があつたからだと納得している。

このように御風は、第一に、「天の夕顔」に示される浪漫精神が西洋由来のそれではなく、日本の文学が古来から継承して



きた固有の精神であるとする系譜性を示し、第二に、そうした精神が西洋の浪漫精神よりも近代的だとする卓越性を主張するのである。

「天の夕顔」を「最も新しい恋愛小説」と評価し、「ウエテルとはまた違った真の日本文学の血統」を読み取る清水文雄の書評もまた、御風が示した二つの事柄に触れている。

平安朝に於いてその極点に達せしめられた相聞歌の発想ここでは恋愛文学の日本的系譜として襲はれてゐる。といふよりその現代的発展を見る。いやもつと具体的にいふと、この作のプロローグとされてゐる和泉式部の歌「つれづれと空ぞ見らるる思ふ人天下りこむものならなくに」の発想がここで見事な今日的再生を遂げてゐるのを見るのである。

清水文雄は、この文章を執筆した昭和一三年、学習院に赴任し、翌年、中等科に在学していた平岡公威（三島由紀夫）に国語を教えており、三島との付き合いは三島が亡くなるまで続いた。昭和一九年七月一日付の清水の日記を見ると、三島から手紙で相談を受けていることが記されている。相談内容は、中河が編集主幹する雑誌『文芸世紀』（保田や神保光太郎など旧『日本浪漫派』の人々が同人として参加した）に、三島が小説「朝倉君」の原稿を持ち込んだところ、中河から同人に加わるよう勧誘されたがどうすればよいか、というものだった。三島と中河、三島と日本浪漫派、あるいは日本浪漫派と後述する雑誌『文芸文化』との関わりなどを考える上で興味深いエピソードだが、同日記には「文芸世紀の同人とは好ましくもないことである。入

らないでおけと書いてやろうと即座に決める」とある。実際にそのように指導されたであろう三島は、同人入りの誘いを断っている。昭和一三年七月、清水は蓮田善明らとともに雑誌『文芸文化』を創刊したが、この雑誌はしばしば雑誌『日本浪漫派』と理念において共通するものがあつたことが指摘されてきたのであり、先述したように清水は中河の「天の夕顔」を高く評価してもいた。もつとも、終戦間際のこの頃にもなると、中河の思想が偏狭な皇国史観へとさらに傾斜していつており、そのことを危惧したのかもしれないが、詳細は不明である。

さて、昭和一三年一月に発表された清水の「天の夕顔」評に話題を戻したい。清水は、昭和一六年に刊行された岩波文庫『和泉式部日記』の校訂者であり、戦前から戦後にかけて和泉式部に関する数々の著述をおこなつた人物である。清水が「天の夕顔」評を執筆した時期というのは、やはり蓮田善明らとともに清水自身も発行に関わつた『国文学試論』（第五輯、春陽堂、昭和一三・六）に、論文「物語の形成 和泉式部日記を中心として」を発表して間もなくのことでもあつた。

いわば、和泉式部研究の第一人者が、「天の夕顔」を和泉式部の歌「つれづれと空ぞ見らるる思ふ人天下りこむものならなくに」の「見事な今日的再生」とした言葉には、やはり重みがある。清水が強調しているのも、御風と同様に、「天の夕顔」の古さ／新しさの両面についてであろう。近代以降に書かれた日本の「恋愛文学」は、万葉の時代から受け継がれてきた「相聞歌の発想」を切り離し、西洋的な浪漫精神を移植したものと

して成立した。しかし、「天の夕顔」は、「相聞の発想」を蘇生し、今日の文学に注入したことで、「恋愛文学の日本的系譜」に連なる「最も新しい恋愛小説」となり得ていると考えたのである。

実際、「天の夕顔」発表に先立ち、中河は『万葉の精神』（千倉書房、昭和一二・七）を刊行し、「私は今日の文学が何よりも取りかへさなければならぬものは、万葉にあつた精神であると思つてゐる」としていた。その意味で、清水の「読み方」は正鵠を射たものだったといえる。だが、中河の〈万葉精神への回帰〉の主張には、後に清水が愛弟子から遠ざけようとした（と推測される）危険な思考の萌芽が胚胎していた。この時期の中河の思考についてはかつて考察したが、ここで改めて確認しておく。中河における〈万葉精神への回帰〉とは、〈民族の自覚〉という問題意識に立脚していた。

永遠と全体を思ふ時、吾々は時に現在と自己の利益を捨てても崇高なものにつながらうとするのである。（中略）犠牲とは自己を殺すことではなく、征服者としての自己を吃立し、自らを最も偉大なるものに連結することである。個人を否定するのではなく、個人を知る事であり、個人を全体との関係に於て最も生かす事である。

「民族」||「全体」に「永遠」性を付与するためには、「自己」を「犠牲」にしなければならない。中河の「犠牲」の概念は、ドイツ観念論哲学者であるフイヒテが、ナポレオン占領下のベルリンで行った講演『独逸国民に告ぐ』（一八〇七）に由来す

るものだったが、それは「自己を殺す」ことではなく、「自己」を「崇高なもの」||「全体」に接続する行為であり、「自己」に「永遠」性を付与することでもある。同様の主張は、同時期に執筆された「ドイツへの関心その他」でも繰り返しなされている。

吾々が民族を自覚せんとして美の系譜を樹立せんとしてゐるのは、その為であつて、それは今日の政治を啓発し、指導するところの最も文学的態度である。吾々は政治を云つてゐるのではない。更にそれ以上の民族の系譜に就いて述べてゐるのである。

「文学的態度」とは〈民族の自覚〉を促すことであり、そのためには〈万葉精神〉に立ち返つて「美の系譜を樹立」し、また「自己」を「犠牲」とする作品を創出することで、そうした「美の系譜」を絶やさぬことである。こうした発想は、日本の文芸を内部から支えてきた精神の〈発生〉の系譜||「血統」を樹立しようとした保田與重郎ら日本浪漫派の運動の強い影響下で醸成されたものだったが、中河は、〈美の系譜の樹立〉という「浪漫主義」的实践を介して積極的に大文字の「政治」に関与しようとした。やはり同時期に執筆された「民族的全体主義の構想」を見てみよう。

然らば新しい精神運動とは何であるかと言へば、人間が精神によつて生きる事の最も美しき事を説き、精神に生きる時、初めて物質の困苦をも、世間的苦痛をも征服して崇高の行ひを人間がなし得るといふ事を知らしめる事であ

る。私はこの表題に全体主義の構想といふ言葉を掲げた。これ即ち精神の高潮を政治理論の形に於て表現したところのものであって、所謂、自由主義、共産主義を征服せんとするところの思想である。<sup>(注20)</sup>

「精神に生きる」<sup>(注21)</sup>「物質の困苦をも、世間的苦痛をも征服して、崇高の行ひを」する「人間」、いわば「自己」を「犠牲」にする「人間」を描くことを通して、「自由主義、共産主義」的政治思想に侵食された人々の精神を変革すること、「文学」の「役目」とはそのようなものであると中河はいう。中河のいう「民族的全体主義」とは、〈万葉精神〉につらなる崇高な浪漫精神<sup>(注22)</sup>「全体のために自己を捧げるという態度」を謳い上げること、<sup>(注23)</sup>「国土に対する愛」を共有する民族集団を樹立しようとする政治的変革の主張だった。そのことは、「自由主義、共産主義」的政治思想を直接批判するような、いわゆる「国策文学」を書くことを意味しない。むしろ、「美としてのもの、人間を鼓舞するものとしての愛。相手のためにみづからを捧げて惜しまないものとしての恋愛小説」<sup>(注24)</sup>を執筆すること、それがすなわち〈全体主義〉を実行することだったのであり、ゆえに中河はアジア・太平洋洋戦争中、「恋愛小説しか書かなかつた」<sup>(注25)</sup>。中河においては、「国を愛することも、人を愛することも同じ」<sup>(注26)</sup>地平の実践だったのである。

#### 四 倉田百三の恋愛観

「祖国への愛。神への愛。恋人への愛。」とは、倉田百三の「天の夕顔」評（「魂の掟を持つ文芸」）の一節である。「祖国への愛」と「恋人への愛」とを無媒介に等価なものとして連絡する危うい言説構造は、中河のそれと見紛う類似性を有している。中河が〈全体主義〉を基盤として執筆した「天の夕顔」（昭和一三・二）を発表した時、倉田もまた「祖国への愛と認識」（思想社、昭和一三・二）を発表し、「大乘的日本主義」と呼称する全体主義思想を鼓吹していた。同書が刊行されるや、中河は倉田百三氏はこの書の中で心燃えて国への愛を説いてゐる。あたかも愛人に捧げるが如き熱情をもつて、国への信従と献身とを描いて余すところがない<sup>(注27)</sup>と、最大限の敬意を表明していた。

「恋人への愛」を論じた『愛と認識との出発』（岩波書店、大正一〇・三）でベストセラー作家となった倉田は、昭和一〇年前後より突如、「祖国への愛」を論じるようになっていった。

もつとも、昭和一二年に『愛と認識との出発』の二度目の改版が出された際、倉田は「版を改むるに際して」という文章を寄せ、自分の思想は変化もしたが、若者たちに「示唆に富める手引きとなり得る」としたのであり、恋愛観の基本線に変化はなかった。『愛と認識との出発』は、昭和一八年に旧制第一高等学校で行われた読書状況に関する調査において愛読書一位に選ばれており、倉田の恋愛観は、「天の夕顔」が発表された昭和一三年当時においても、若者を中心に広範に流通していたと



することができる。

そして、恋愛小説「天の夕顔」の流行現象は、そうした倉田の恋愛観の若者への浸透という事態とおそらく無関係ではなかった。というのも、これから見ていくように、倉田は新聞連載四回に及ぶ長大な「天の夕顔」評を執筆し、作品に描かれた「地上的ならぬ恋」を絶賛していくからだ。その一方で、〈天の夕顔ブーム〉を単なる恋愛思想の興隆現象と見ることはできない。すなわち、二人の全体主義者が恋愛観において一致を見せたのは、中河が倉田の『祖国への愛と認識』に激しく共鳴したことからも推察できるように、ただの偶然ではなかったのである。「天の夕顔」の流行現象が肥大化していく経路は、中河が提示する恋愛の享受を媒介として、人々に〈全体主義〉思想が忍び寄る過程であるとする視角が不可欠である。

『愛と認識との出発』には、ほぼ発表順に恋愛に関する論文が掲載されているが、一連の論文を執筆する過程で経験した失恋を契機とし、前半に提示される恋愛観が、後半になるに従い否定され変質するという基本構造を持つ。前半で示されたのは、「霊肉一致」の思想である。

私は男性の霊肉をひっさげて直ちに女性の霊肉と合一する  
とき、そこにもっとも崇高なる宗教は成立するであろうと  
思った。真の宗教はsexの中に潜んでいるのだ。<sup>(注35)</sup>

倉田はこのように「性欲」を積極的に肯定し、「肉体」の交わりを排した「霊」の交わりはないと主張する。「恋愛」＝「sex」であり、それ自身が「真の宗教」だった。ただし、「sex」が「真

の宗教」となるためには、「私は私の心身の全部をあげて愛人に捧げた。私はどうなつてもいい。ただ彼の女のためになるような生活がしたいと思う」というような、「永遠に渡りて最も心強き献身的なる犠牲の心」<sup>(注36)</sup>が不可欠となる。

ただし、こうした「sex」を巡る考えは、先程も述べたようにその後明確に否定されていく。「肉交の最も嫌悪すべきは、この恐るべき相を愛の絶対境と混同しあるいは自ら欺くところにある。愛の絶対境は犠牲であつて肉交ではない。肉交はエゴイズムの絶対境である」というように、「犠牲」という「愛の絶対境」に到達するとき、「魂」は清められ、「性欲の要求の飽和が感じられる」ようになるとする。<sup>(注37)</sup>もつともこの時、倉田は「性欲」の呪縛から解放されていたわけではなかった。

私は聖者になりたい。(中略)それ(稿者注―聖者)はつ  
くられたものとしての限りを保ち、人生の悲しみに濡れ、  
煩惱の催しに苦しみ、地上のさだめに嘆息しつつ、神を呼  
ぶところの一個のモーターである。<sup>(注38)</sup>

ここで「聖者」として具体的にイメージされているのは親鸞であり、倉田は浄土真宗という具体的な宗教に傾倒していくことで救われようとしていく。「性欲」は絶対悪だが、それは捨て去ることなど出来ないものでもある。だが、それと争闘し、「善くならうとする」不断の努力が出来る者こそが「聖者」であるというのだ。注目したいのは、倉田の恋愛観における「性欲」に対する考えが大きく転回する一方で、「犠牲」の観念は崇高なものとして一貫して尊重されて続けたということである。

「天の夕顔」に示される恋愛は、まさに「性欲」に苛まれながらもそれに打ち克ち、自らを「犠牲」にする「愛の絶対境」に到達していく〈聖者の恋愛〉として、倉田には理解されていくことになる。

## 五 倉田百三「魂の掟を持つ文芸」

倉田の「天の夕顔」評である「魂の掟を持つ文芸」(原題「たましひの掟を持つ文芸―「天の夕顔」をよんで―」)は、『やまと新聞』(昭和二三・九・三〇)一〇・四)に四回に亘り連載された。単行本刊行直後に書かれており、荷風の書簡を除けば最も早い反応であり、分量的にもすべての同時代評の中で最も多い。では倉田のいう、「魂の掟」とはいかなるものであったか。

其処には相思ふ男と女とが此の世の律法にへだてられつつ、しかもそのモラルを尊ぶの故にその恋愛を超えようともがきつつ、人間性に復讐されては悩み苦しみ躓いては更らに屈せず、起き上つて、二人の間に樹てたましひの共通の自律の掟を守り抜かうとする霊魂的の苦闘の記録が描かれてゐる。<sup>(注4)</sup>

大学生の時初めて会つて、四十五の時に思ふ人と逢へずに死に別れる迄二十幾年間、絶えず燃えるやうに恋しつづけつつも、それを強い冷徹した意志でたくましく否定しつつ、幾たび破れんとしては愛人の戒律的の拒絶によつてすくはれつつ、耐へに耐へた苦闘の果てに、<sup>(注5)</sup>(後略)

それは、「破戒的不倫」を回避するために、もう会わないようにしようとするも出来ず、さりとて「人間性」≡「性欲」を払拭出来ない二人が、そうした自らの愚かさを自覚しつつ、決して一線は越えまいとした誓いである。しかも、そうした関係性が、人妻である「あの人」が亡くなるまでの「二十幾年間」にわたり続けられたことについて、倉田は「地上的ならぬ生、人間性を超えた厳しい神意の世界への狂熱的な、しかも戒律的な精進」、あるいは「霊魂的求道」であると、そこに宗教的な意味を見出していくのである。<sup>(注6)</sup>

もつとも、そうした宗教的であるとすると意味付けは、倉田の恣意的な解釈というわけではなく、「天の夕顔」の作品世界に内在的な要素でもあった。「あの人」は幼少時より父親とともに「王禪寺」に参禅し、「結婚も王禪寺の管長を仲人にし、今も夫の留守の間、管長に会うことを、一つの務め」としており、「老師はいつもおっしゃるのよ。―愛欲の垢尽くれば道見ゆべし―」<sup>(注7)</sup>。でもわたくしには一体いつ道が見えるのかしら」と、自身の「愛欲の垢」を認めつつ、「道」のためにそれに「打ち勝とう」とするのである。

それに対し主人公の男は、「わたしはあの人<sup>(注8)</sup>の精神的な苦悶がわかり、それを尊敬し、あの人<sup>(注9)</sup>の心を主としてそれに従う事に本当の愛を見つけてゆこう」と、「人間の愛情というものが、いかに克己によつて神聖化せられ、美しくなるかということを感じ、そういう話を聞くにつけて、余計にあの人<sup>(注10)</sup>を崇高に感じる」とあるように、自身の「愛欲」が、「あの人」の「克己」

心により拒絶されることでもかえって、「あの人」の「求道者」<sup>(注4)</sup>としての「宗教的」な「崇高」さに、ますます惹かれて行くことになるのである。

主人公の男のこうした態度が、「永遠と全体を思ふ時、吾々は時に現在と自己の利益を捨てても崇高なものにつながる」とするのである<sup>(注5)</sup>とした、中河の「犠牲」の観念に裏打ちされたものであることは多言を要しない。そしてそのことは、物語の終盤、「あの人」を想い続けた「二十幾年間」を主人公の男が自嘲的に振り返る場面で、集約的に示されることとなる。

考えてみると、わたくしは生涯の間、男と生れて来て、本当に何もしませんでした。言ってみれば、一生を棒にふつたのです。功利の世に生れて来て、そこに生きる術を知らず、自ら自分を破壊に陥し入れたのです。おそらく世界一の愚かな男にすぎなかったのです。(中略)このあわれな男の話を、この狂熱の誤謬に似た生涯を、どうぞ笑って下さい。<sup>(注6)</sup>

この場面について倉田は、「最も信じ難いやうな夢を、最も熱烈に信じ、打算的に愚かな極みの願ひに一生をかけた人間を私は尊敬する。そして私も亦そのやうな『痴人』でありたい」と、自分の人生を「犠牲」にしてまで「あの人」を愛し続けた主人公の男を称賛する。

そして、「私も亦そのやうな『痴人』でありたい」という倉田の願望は、「私は聖者になりたい」とした切なる願望の裏返しに他ならなかった。親鸞のように「人生の悲しみに濡れ、煩

悩の催しに苦しみ、地上のさだめに嘆息しつつ」も、「地上的ならぬ生」への「戒律的な精進」がそこにはあると考えられたのである。

## 六 おわりに

倉田の恋愛観の基盤には、自分の悟りを優先する小乗的なありようを超えた、浄土真宗の大乗精神に由来する「犠牲の心」<sup>(注7)</sup>があった。一方、中河の「犠牲」の観念は、フィヒテに由来するもので、その根源は異なるものだった。しかし、これまで見たように倉田は、「天の夕顔」の登場人物の行動を、自身が考える「犠牲」という概念に引きつけて理解し、意味づけていったのである。

そして、そのような倉田の「読み方」は、倉田の恋愛観に同調する多くの読者により、踏襲されていったはずだ。すなわち、倉田が単なる一読者ではなく、当時の恋愛観に大きな影響力を持つ読者であるとすれば、倉田の「読み方」が、その後の「天の夕顔」の読まれ方を強力に方向付け、「天の夕顔」が多くの読者を獲得していく、一つの要因ともなっていたのではないかとするのである。むしろそのことについては、倉田の恋愛観を共有していた層や人員の数の問題とあわせて、さらなる検証が必要であろう。

ところで、中河と倉田の「犠牲」の観念に差異があったとしても、二人がともに「犠牲」の観念を恋愛に枢要なものである

ことを主張しベストセラー作家となったことについては、改めて認識しておく必要があるだろう。しかも、戦時色が濃くなるにつれ、そうした「犠牲」の観念を国家や民族に押し広げ、全体主義の鼓吹者となつていった軌跡も重なる。そして両者は互いに「霊魂的の同類」<sup>(註1)</sup>などと共振してもいたのである。実は「天の夕顔」が掲載された『日本評論』「創作」欄(新年臨時号、昭和一三・一二)には、倉田の小説「東洋平和の恋」も掲載されていた。いわば同二作が一对になるように掲載されていたのだが、そのことはその後の二人の関係性を暗示するかのようでもある。倉田が全体主義を唱えるに至る経路については小論の分析の範囲を超えるものであったが、二人の恋愛観に共鳴する読者が、やはり全体主義の心酔者となつて行つたことも想像に難くない。

小論が試みた同時代評の整理、特に倉田の「読み方」の検討は、全体主義が跋扈する時代に「天の夕顔」が読まれていった理由とその影響圏を検証する上での糸口となるものであるといえるだろう。

## 注

(1) 保田與重郎「解説」『天の夕顔』新潮社、昭和二九・五、九六頁

(2) 中河與一「天の夕顔前後」古川書房、昭和六一・六、八八頁

(3) 前掲、保田「解説」九六〜九七頁

(4) 同前、九八頁

(5) 同前、九九頁

(6) 前掲、中河「天の夕顔前後」八九頁

(7) 同前、九〇頁

(8) 『荷風全集』第三卷、岩波書店、昭和四七・二一、二四七〜二四八頁

(9) 注(5)に同じ。

(10) 『不確定性ペーパー 第三輯』掲載の書評五編はいずれも荷風の書簡への言及はない。荷風の書簡が公表された時期が、『不確定性ペーパー 第三輯』の原稿締切日より後だったことが推測されるが、詳細は不明である。

(11) 中河與一宛永井荷風書簡(昭和一三・一二七付)。引用は「批評集」(二頁)より行つた。

(12) 前掲、保田「解説」一〇二頁

(13) 与謝野晶子「天の夕顔」『不確定性ペーパー 第三輯』「天の夕顔」中河與一作品研究」新典社、昭和二三・一二、一頁

(14) 前掲、保田「解説」一〇一頁

(15) 南川潤「天の夕顔」『三田文学』昭和一三・一二。引用は「批評集」(二三頁)より行つた。

(16) 北原武夫「新刊批評―中河與一氏著「天の夕顔」(K)―」『文体』昭和二三・一二。引用は「批評集」(一五〜一六頁)より行つた。

(17) 相馬御風「生々悲痛の哲理」『読売新聞』昭和

一四・三・一八。引用は「批評集」(二三頁)より行つた。

(18) 清水文雄「日本的発想」『国文学 解釈と鑑賞』昭和  
一三・一一。引用は「批評集」(一五頁)より行つた。

(19) 清水文雄「清水文雄「戦中日記」 文学・教育・時局」清  
水明雄編、笠間書院、平成二八・一〇、一三七頁

(20) 大久保典夫「戦争と昭和のロマン主義」『昭和文学史の構  
想と分析』至文堂、昭和四六・一一

(21) 中河與一「万葉ギリシヤ」『万葉の精神』千倉書房、昭和  
一二・七、四頁。同書によると、執筆年月は昭和一一年七月  
三〇日。

(22) 拙稿「戦時下日本浪漫派言説の横顔―中河與一の〈永遠  
思想〉、変奏される〈リアリズム〉」『三田國文』平成  
二二・一一

(23) 中河與一「民族と文化」『万葉の精神』千倉書房、昭和  
一二・七、七八―七九頁。同書によると、執筆年月は昭和一一  
年十一月五日。

(24) 中河與一「ドイツへの関心その他」『日本の理想』白水社、  
昭和一三・五、二九頁。同書によると、執筆年月は昭和一二  
年一月一日。

(25) 中河與一「民族的全体主義の構想」『全体主義の構想』作  
品社、昭和一四・二、六一頁。同書によると、執筆年月は昭和  
一二年十一月一日。

(26) 同前、六六頁

(27) 中河與一「時評 恋愛小説について」『全体主義の構想』

五三頁。同書によると、執筆年月は昭和一三年七月七日。

(28) 保田與重郎の回想(中河與一・保田與重郎「日本のこゝ  
ろ 日本浪漫派の美意識」ぺりかん社、昭五七・一二、七五頁)。

(29) 前掲、中河「時評 恋愛小説について」五四頁

(30) 中河與一「倉田氏の本」『日本の理想』二二七頁

(31) 倉田百三「版を改むるに際して」『改版 愛と認識との出  
発』岩波書店、昭和一一。引用は、『愛と認識との出発』(岩  
波書店、平成二〇・一〇、三二五頁)より行つた。以下、本稿  
での引用は同書による。

(32) 鈴木範久「解説」『愛と認識との出発』岩波書店、平成  
二〇・一〇、三四三頁

(33) 倉田百三「異性の内に自己を見出さんとする心」『愛と認  
識との出発』一〇三頁。初出は、『校友会雑誌』第一高等学  
校校友会、大正二・三。

(34) 同前、一〇八頁

(35) 同前、一〇九頁

(36) 倉田百三「地上の男女」『愛と認識との出発』二二七頁。  
初出は、「地上の男女―純潔なる青年に贈る―」『愛の本』大  
正七・三。

(37) 同前、二六八頁

(38) 倉田百三「善くならうとする祈り」『愛と認識との出発』  
二二二頁。初出は、「愛と智慧との言葉(その二) 善くなら  
うとする祈り」『生命の川』大正五・一一。

(39) 倉田百三「魂の掟を持つ文芸」(原題「たましひの掟を持

つ文芸―「天の夕顔」をよんで―』『やまと新聞』昭和  
一三・九・三〇～一〇・四。引用は「批評集」(二頁)より行っ  
た。

(40) 同前、三頁

(41) 注(40)に同じ。

(42) 中河與一『天の夕顔』新潮社、平成一五・三、二七頁

(43) 同前、二七～二八頁

(44) 同前、二二頁

(45) 同前、二四頁

(46) 同前、二三頁

(47) 前掲、中河「民族と文化」七八頁

(48) 前掲、中河『天の夕顔』一一八～一一九頁

(49) 前掲、倉田「魂の掟を持つ文芸」九頁

(50) 中島岳志「煩悶とファシズム―倉田百三の大乗的日本主義」  
『親鸞と日本主義』(新潮社、平成二九・八)は、倉田の思想  
遍歴を追跡し、親鸞の大乗精神が倉田において全体主義へと  
接続される経路について考察している。

(51) 前掲、倉田「魂の掟を持つ文芸」八頁

(くろだ しゅんたろう・本学教員)